

氏名	崎谷 明弘
ヨミガナ	サキヤ アキヒロ
学位の種類	博士(音楽)
学位記番号	博音第321号
学位授与年月日	平成31年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉21世紀のピアノコンクールにおける、日本出身ピアニスト・コンテスタントについて 〈演奏〉Beethoven ピアノ協奏曲第5番「皇帝」作品73(Ignaz Lachner 編曲による室内楽版) Brahms ピアノソナタ第3番 作品5

論文等審査委員

主査	東京藝術大学 教授 (音楽学部)	迫 昭嘉
副査	東京藝術大学 教授 (音楽学部)	大角 欣矢
副査	東京藝術大学 教授 (音楽学部)	山下 薫子
副査	東京藝術大学 准教授 (音楽学部)	青柳 晋

(論文内容の要旨)

ピアノ部門のある国際コンクールが初めて開催されてから早 130 年近くが経ち、コンクールは、演奏家キャリアへの履歴書として、あるいは日々の研鑽と学習のために、殆どのピアニストにとって欠かせない、世界中で定着した制度となった。しかしその結果が時に人生を大きく左右するにもかかわらず、実践についてはコンテスタントと指導者に一任され、国際ピアノコンクールの世界的な実情も印象論で語られるのみで、学術的な研究は進んでいない。ましてや日本出身者・日本市場という文脈で、データに裏付けられた考察は行われて来なかった。

本論文は、21 世紀における日本出身コンテスタントや入賞者の現況を把握すると共に、コンクールの特性や入賞の価値が、日本の周辺環境に広く認識されているか明らかにすることを主な目的とし、世界的に日本はどの程度の割合で入賞者を出し、日本人入賞者はどういった経歴を持つのか、また、現代のコンテスタントたちは何を考え、何を目的にコンクールを目指し、難関コンクール入賞者には特別な違いがあるのか、そして、日本の聴衆・市場・メディアは入賞をどのように捉え、扱っているのかを中心に検証・解明を行い、明らかとなった問題への提言をまとめたものである。

研究の前提として第 1 章では、最も重要な先行研究である L. L. H. マコーミックの論文について詳説し、功績と批判を述べた上で、本研究におけるポリシーを記した。

続く第 2 章では、今世紀の高難度国際コンクールにおける国・地域別入賞傾向と日本人入賞者の特質や経歴を把握するため、WFIMC 加盟、または加盟経験のあるコンクールとその入賞者について、様々な統計的調査を行なった。その結果、日本は露・韓に次ぐ世界 3 番手に位置するが、2009 年を境に東アジア首位の座を韓国に譲り、入賞数も大きく減少していることや、入賞年齢が世界と比較して遅く、特に男性はその傾向が顕著であることが判った。また、日本人入賞者について代表的な国内コンクール(全日本学生ピアノコンクール、ピティナ・ピアノコンペティション D/E/F 級と G/特級、日本音楽コンクール)での入賞の有無を調査したところ、入賞経験率は学生向けのもので 25.9%、一般向けは 37.0%にとどまり、難関国際コンクールの入賞と強い相関は見られなかった。他にも日本人が得意とするコンクールや、日本人審査員招聘と入賞との関連についても判明した。

第 3 章では、コンテスタントがコンクールやキャリアをどのように考え、それに向けて何を実践しているのかを解明するため、日本の専門教育を受けた経験のある 10 代後半～30 代前半のコンテスタント 163 人を対象にしたアンケート調査と、WFIMC 加盟コンクール入賞者である若手ピアニスト 4 名にインタビュー調査を実施し、申し込み・学校での情報教育・レパートリー・練習・参加環境・本番の演奏・他者からの影響・子供時代のコンクール・キャリアへの意識・勝つことと芸術性を深めることとの葛藤といった諸問題について考察した。ここでは、コンテスタントの 95.1%が、大コンクールでの入賞が将来に繋がると答えたにもかかわらず、コンクールを選択する上で、キャリアアップより自己研鑽を重視する傾向にあることや、63.8%が日本を活動拠点とすることを考えているものの、音楽事務所に所属し演奏活動のみを行うと志望する者は 3.7%と非常に少なく、現代の若手が市場の既存の枠組みには懐疑的であることなどが判った。

第 4 章では、演奏家を取り巻く周辺環境が、コンクール入賞や入賞者をどのように扱っているのか分かり易く見るため、聴衆へのアンケート調査、在京・在関西のオーケストラ招聘ピアニストの統計調査、そして現役新聞記者へのコンクール報道に関するインタビュー調査と全国五大紙への照会を行い、前章と同様に入賞者へのインタビューを交えて考察を行なった。結果、聴衆はコンクール入賞をある程度演奏の質を担保するものと考えているが、その内実について理解は進んでおらず、来場の継続にも役立っていないことや、オーケストラへの招聘は、入賞歴よりも音楽事務所のキャスティングが重要であり、東京・関西共、定期演奏会ソリストの 8 割超が事務所所属者によるものであったこと、新聞報道の明確な基準は設けられておらず、過去の入賞者の活躍や社会的注目といった入賞者本人では制御できない要素が、記事掲載の有無に影響を与えていることなどが明らかになった。

第 5 章にまとめた提言では、これまでに浮き彫りとなった「WFIMC 加盟コンクールにおける日本人入賞者減少への対策」、「周辺環境のコンクール入賞への理解を深める」という二つの課題について、前者には、高校までとそれ以降とで分断を起さず、一元的に長期計画で教育に取り組むことや、大学の学習体制の改善策等を提案し、後者には、演奏家自身がコンクールの特色や水準を発信することが重要と論じ、一つの基準として、WFIMC 加盟 62 コンクールを活躍する過去の日本人入賞者の情報等を用いて 3 群に分類し、最後に今後の展望を述べた。

これらの調査・分析・考察から、日本ではコンクールのリソースや入賞の価値を十分に活用できておらず、課題を解消するためには、経験者・実践者であるピアニスト自身が主体となって、育成システムの見直しや情報発信に努める必要があると結論づけた。

(総合審査結果の要旨)

本研究は、2001年から2017年までに開催された国際音楽コンクール世界連盟(WFIMC)に所属する、あるいはそれに準ずるコンクールの日本人ピアニストの入賞状況を検証し、アンケートをもとにコンテスタントのみならず彼らを取り巻く環境へも視点を向けてコンクール入賞に対する意識の在り方を考察しようとしたものである。

限られた先行研究としてL. McCormickの論文（2008）を批判的に検討し、現在のコンクールの状況を把握するにはより十分な情報が必要と分析する。そこで実施したのはコンクール入賞者の調査と入賞者へのインタビュー、および、対象をコンスタントから聴衆からメディアに至るまで広げたアンケートである。収集された膨大なアンケートはおそらくコンクールの実態を包括的に見る事が出来る初めての資料というべきものである。また、コンクール後の入賞者のキャリアについても、新聞報道の取り上げられかた、東京と関西のオーケストラ730公演における日本人入賞者の起用の実態調査などを実施している。蓄積した資料の価値の大きさの一方で、観客性を担保させるはずのこれらの資料から申請者は結果として2つの課題、「WFIMC加盟コンクールの日本人入賞者減少」と「コンクール入賞者の周辺環境の理解不足」を挙げ、これらについてそれぞれ提言をおこなっている。しかしその提言はコンクール入賞とその後のキャリアのための傾向と対策に大きく偏っている。本人が多くのコンクールに優勝・入賞を重ねてきた実績をもっており、実践研究として評価はできるが、本来、調査で得た材料から得られるべき広い視点や考察が「コンクールありき」に終始してしまったことは残念である。また、本文と資料が分かれておらず非常に読みづらい、学術論文になじまない言葉使いかたが多かったことなどが指摘された。

演奏審査会では、1曲目にベートーヴェンの「皇帝」を、V. ラハナーによってオーケストラパートを弦楽五重奏に編曲された珍しいヴァージョンで演奏し、後半をブラームスのピアノソナタ第3番で締めくくった。二曲とも技術的、音楽的に隙が無く、ダイナミックレンジの広い安定した演奏であったが、今後アーティストとしてさらなる研鑽を望みたい。

論文・演奏ともにいくつかの問題を抱えていたが、その研究成果は博士の学位を授与するには十分に値すると判断して合格とする。